

令和俳句論考

百瀬 初江

隠国の道の果てなる秋早
掌に置きて山繭生きてある重さ

宮田 正和

(第四句集『風の百日』より)

本句集名「風の百日」は、作者の代表作である「雪よりも風の百日伊賀盆地」からとったことがあとがきに記されている。この句は地元句碑が建てられており、伊賀は作者にとって句の原点なのだ。本句集最後の句「晩秋の底無きまでに晴れし伊賀」は、生涯を故郷伊賀で暮した作者の魂の言葉に他ならない。

一句目、隠国（こもりく）とは山に囲まれ奥まった場所のことである。その隠国の行き着いたような伊賀盆地は、立秋を過ぎても雨が降らず、水不足を心配するような厳しい暮らしの地。だがこの地こそ、自分が生まれ育ったかけがえのない場所なのだ。

二句目は、作者が主宰する「山繭」三十周年と題された句である。ヤマユガの繭は鮮やかな黄緑色である。手の上の繭には、生きている確かな重さがあり温かい。俳句と共に生きた自らの人生と大切な句友への慈しみが、読む者の心に沁み入ってくる句。

氏は「山繭」名誉主宰

カクテルの泡立ち上る月の舟
背に小さき手のひらの跡雪だるま

金子 敦

(第七句集『ポケットの底』より)

一句目、月の美しい夜は気取ってカクテルを飲みたくなる。窓際の席、いや家のベランダかもしれない、カクテルグラスを掲げグラスの中に泡が上っていくのを楽しんでいる。そのグラス越しに月が映える。三日月であろうか、まるでカクテルの海へ漕ぎだしたような月の舟だ。一瞬の非日常を演出するおしゃれな時間。

二句目、雪が降った。外へ出た作者は、通りすがりに雪だるまを見つけた。近づいて見た作者は思わず微笑んだに違いない。雪だるまの背中に、小さな手のひらの跡がしっかりと残っていたのだ。小さな雪玉を大玉の上に乗せることになったのだろうか、雪を楽しんだ子供たちの笑顔も浮かんでくる。日々の生活の中で、ふと心を癒してくれる一枚のスナップ写真のような句。

氏は「出航」同人

ひだるさや鴨草は鄙の色
しんと雪牛の眠りのそのなかへ

鈴木 牛後

(第四句集『鄙の色』より)

あとがきによれば、本句集は、北海道生まれの作者が、関東へ転居する前の五年間の作品をまとめたものである。年毎に白・黒・緑・銀・青の彩りの章を立てた。さらに、読者の負担をなくし、読みを確定する利点を踏まえ、総ルビを採用している。

一句目は「白樺の樹皮」の章の頭韻の句。空腹で気怠い日、白い花を満開に咲かせた鴨草が、北海道の広大な牧草地に拡がっている。まさにこの鄙の地にふさわしいひそやかな色に思える。それはまるで、装画「月下牧童」の織りなす牛と童の風景である。

二句目は、「銀の凍」の章の句である。作者は牛と共に日々の生活を送っている。北海道の雪は白銀の粉雪である。凍てつく牛

舎で眠る牛たちをそっと包み込むような雪の夜、穏やかな牛の寝息が聞こえてきそうである。その眠りに読者も引き込まれていく。

氏は「雪華俳句会」所属

まだ固き空を均して春の鳶

磯村 光生

冬薔薇の咲き切らむてふ氣迫かな

（第五句集『小春』より）

一句目、春先の鳶は、旋回しながら空に響く声で鳴く。まだ冬の寒さを残した空を舞う鳶の姿は、季節の移り変わりを促しているかのようだ。それを「まだ固き空を均して」と表現した作者の感性は豊かである。空を見上げながら、鳶の笛に柔らかな春の氣配を感じている作者の心が伝わってくる。

二句目、冬枯れの庭に咲く薔薇の花。その姿は健気で凛とした美しさを湛えている。作者は、最後の花びらが落ちるまで咲き続けるその生命力に心を打たれたのだ。掲句と同じ章に「病棟にあまねく光年明くる」そして「訪ふ妻の澄みゆく眼水涸る、」の句がある。病と闘う妻の姿を冬薔薇に重ねているように思えてならない。妻への愛とリスベクトの句として読みたい作品である。

氏は「風友」主宰

わが影を砂漠に置きし初景色

大久保文夫

マロニエ咲くパリへ妻との終の旅

（第一句集『風騷』より）

「百代の過客のひとり初日浴ぶ」と自らを称する旅の人である。アフリカやロシア、フランスなど世界の国々や日本国内各地を「風鈴に留守を委ねて旅に立つ」日々を送り、数々の句を詠んでいる。一句目は「サハラの日」と題された章の句。サハラ砂漠で新

年を迎えた。眼前に広がる広大な砂漠。強大な自然、砂漠に自身の影を見据え、作者は自らの人生を深く考えた。そして新たな決意を胸に秘めたのではないか。臨場感溢れる力強い句である。

二句目は「追憶」と題された句である。マロニエはパリのシャンゼリゼ通りの街路樹、西洋トチノキ。白や赤の花が集まり円推状に咲く。パリの楽しい日々が二人にとって最後の旅の記憶となった。作者にとって旅の思い出は妻との大切な記憶でもあるのだ。「天上に妻を待たせて星逢ふ夜」、何処へ行つても妻は空に居る。氏は「いには」同人

奔流のごとく町ぬふ桜かな

吉田 菫

體もて一点を打つ筆始

（第一句集『二点』より）

一句目、桜並木が町の中心通りなのだろうか、折しも散り始めた桜の花びらが、歩く人の髪や歩道に降りかかる。降りしきる花びらは、風に乗る激しい流れとなって町を縫い通り抜ける。散り際の潔さが、古より多くの文人、人々に愛される桜。散る桜を「奔流」と表現した作者も、その美しさと儚さに魅了されている。

二句目、新しい年を迎え、筆をもった作者。これからの一年間への思いを込めて書をしたためる。心と體を整えて白い紙に向き合い、筆を動かしていく。運筆はすべて一発勝負である。全身全霊を込め一点を打つのだ。あとがきに「近頃の私は対象に一步踏み込む、または対象との境界を取り払う、そんな句作を心掛ける」と書いている。作者の真摯な句作姿勢が句の中に見えてくる。

氏は「空」編集同人

（筆者住所 〒300-0815 土浦市中高津二一六五）